

お台場の海で海苔ができた！！

港区立港陽小学校校長 角田美枝子氏

インタビューア MANA (なかじまみつる)



●プロフィール

(かくた・みえこ) さん：

昭和23(1948)年生まれ。
明星大学卒。昭和50年
目黒区中目黒小学校教員
就任以来東京都区内小学

校教員として教育の現場に立ちつづけている。大田区馬込第三小学校教頭、同区田園調布小学校教頭を経て、大田区立千鳥小学校、港区立青山小学校の校長歴任後、平成17年4月に港区立港陽小学校校長就任(現職)。お台場干潟再生プロジェクトとしてアマモの移殖・定殖や、お台場の海で採れた生きものたちを「海水ビオトープ」で飼う試みにとりくみ、本稿で紹介した「お台場海浜公園内の海でノリづくりの実験」を行うなど、地域の環境をいかした環境教育を通し特色ある学校教育を推進している。

[共水連リレートーク原稿(06年8月14日取材) 漁協の共済 10月号 リレートーク第81回]

【リード】

東京都港区立港陽小学校は、お台場海浜公園の砂浜と道路を隔てて校舎が建つ。学校の側か

ら見れば、校門のまん前に砂浜があり海が広がるという、まさに「学校の地先が海」の「臨海小学校」だ。開校は平成8年。お台場海の公園周辺に整備されたマンション・団地に入居する“新住民”のために設立された小学・中学併設式の学校だ。

「海が目の前にある環境をいかすために、昔この場所が江戸前の豊富な魚介類の産地であったことを実感してもらうために、この海で海苔ができないだろうか。子どもたちに江戸前の海の姿や生きものに触れさせてあげたい」と考えた、三代目校長の角田美枝子先生の熱情込めたアイデアを聞いた、公園管理者の都や関係省庁、東京湾を再生したいと活動するNPO団体、千葉県木更津のノリ養殖漁業者、都漁連さん下漁協

写真：



子どもたちが家に持ち帰った海苔の袋には「海苔を守ろう—お台場ふかつ特産海苔」のブランドのシールが貼られた。

有志など、多くの人々が協力して、この「夢」が実現した。

今年3月3日、ノリづくりが成功し、収穫した生ノリを、生徒たちと、父兄・教員・ボランティアの人々みんなで天日干しで板海苔にし、学校生徒全員に、「2分の1枚」ずつ配られた（担当した5年生には1枚ずつ）。「海」の大切さと漁業という「営み」の現場を子どもたちに体験させた「お台場ノリづくり」プロジェクトの計画から実現、そしてその後の影響について、同校角田校長先生にお話をうかがった。

お台場の海をもっと知ろう

——子どもたちにお台場の砂浜にでて海や生き物と接触する、そういうアイデアがどこから生まれてきたのですか。

校舎がお台場の海と眼と鼻の先にありながら、子どもたちにとっては、お台場の海は“身近な存在ではない”という事実が先ずありました。砂浜に出て遊ぶことも少ないですし、地元以外の人は、砂浜にアサリを取りに来ている、ここに住んでいる子どもたちも、その親ごさんも、それを食そうとはしたがりません。これが現実でした。

せっかく、こんなすてきな海浜公園が身近にあり、人工的に作られた公園とはいいながらも自然に恵まれていながら、それに愛着をもてないでいる、ということと、目の前にお台場海浜公園を抱えている学校であるならば、もっと海を活用した教育活動ができないだろうか、と考

えました。

それが、当校の特色ある教育活動になるはずです。その特色をなんとしても作りたい。子どもたちが、誇りに思う学校。自分たちは、“環境”を“保護”することにも貢献しているのだ、というような、誇りを持ってほしい。そして、夢のある教育活動をしたいというのが、一番の根底にありました。

——子どもたちは自然とのつながりをもつ機会が少ないですし、お魚の名前と実際のさかなの生きている姿、食べものと、その食べものが自然のなかに育っている姿があることをなかなか実感できません。

まず、学校の目の前に「海水ビオトープ」をつくりました。そこにお台場の海の生き物たちを入れました。全校児童が、家からペットボトルを持ってきて、お台場の海水を汲んできました。PTAの会長さんはじめ、みなさんがお台場の海に入り、お台場の砂浜に置いた大きなポリバケツに海の水を汲みました。子どもたちが、一人に1本ずつペットボトルで、水を汲んできて「海水ビオトープ」をつくりました。

ここには干潟が作ってあり、そこに、お台場の海で採れたアサリやマテ貝、アナジャコやコメツキガニ……を入れました。岩場も作りました。第三台場の磯の岩を持ってきて、そこに着いていたマガキ、フジツボとか、タマキビガイを名前を調べながら入れました。

子どもたちが、カレイを捕らえてきました。



写真：ついに40年ぶりにお台場の海に海苔ができた。
3月3日校舎入り口の海苔干し作業中に生徒と関係者が
そろって喜びの「トキ」の声を上げる。（「海辺づくり研
究会」提供）

「このお魚入れていい」といいますから、カレーやハゼも入れました。小さな海の世界でしたけれど、これがきっかけになり子どもたちがお台場の海の生き物に関心を持ち始めました。

子どもの関心というのは、ちょっとしたきっかけで、どんどん広がっていくのではないのかなあと子供たちから教えられる思いがしました。

お台場を“見直した”よ

——新しい町ができ、新しいコミュニティーにできた
学校で、住居も景観も環境も新しい。

結論のようですが、全校生徒に出来上がったノリを2分の1枚ずつですがあげたのです。そうしましたら、親子で感想を寄せていただきました。保護者の感想の中に、「お台場の海を見直した」「海苔が採れる豊かな海だったのですね」

というのがありました。子どもたちも、お台場の砂浜や海を見る眼がかわったのですから不思議ですね。

——このお台場周辺が、昔は海苔が採れたり、豊かな漁場であったことは、いまの保護者の人たちもいっさい知らなかったのですね。

人口干潟という印象が、美しく、きれいな海という印象を持てなかったのですね。40数年前まで、ここが漁場だったことも知りませんでした。だからこそ今回のノリづくりの取り組みをとおして「見直した」ということにつながったのですね。感想の中に、やっぱり「汚い」という声は、百何十通集まった中に、一人か二人ぐらいだったのです。

海苔が採れたことを、保護者がここまでみんな喜んでくれました。そして、一人当たり2分の1枚だったにもかかわらず、お父さんの出張の帰るのをまって、みんなで食べましたとか、本当に大事、愛しみをもって食べてもらったということが伝わってきました。

みんな大好きな海苔を作ろう

——海苔を作ってみようというアイデアは、なにがきっかけであったのですか。

NPO法人の「海辺づくり研究会」（設立発起



写真：環境教育に協力をする人々のボランティアとしての「協働」事業の意味が意外にも大きい。(アンダーライン)の部分をあえて記しておいた。

人・事務局担当 木村尚さん)の助言が大きかったですね。でも、ここで海苔を作るのはむずかしい、といわれました。ワカメの方がやりやすいのでは、ともいわれました。

でも、お台場の海を汚いと思っている保護者や子どもにとって、そこにずっと浸っていたワカメを食べるか?と考えたとき、海苔だったら食べるのではないか、と思いました。海苔は、引き潮のとき海から浮いてお陽さまの光をあびて、そして天日で乾燥させ作ったものですから、これなら食べてもらえる。

——「海辺づくり研究会」とはどのように知り合ったのですか。

都の環境課のかたから教えていただきました。ビオトープの時からずっと、助言をいただきました。

そして、ノリづくりには、千葉県木更津のN

PO「盤州里海の会」の金萬智男さんたちノリ漁師の方々に協力をいただきました。東京都漁連の方々、都や関係省庁の皆様方の協力がなければ、この計画は実現しませんでした。

こうした方々に校長が加わった「お台場環境教育推進協議会」が作られ、第一回目会合が2005年10月ごろ開かれました。そして、私が会長になり、「港区立港陽小学校」「東京都港湾局臨海開発部(海上公園課)」「国土交通省関東地方整備局東京港湾事務所」「財団法人東京港埠頭公社」「NPO法人盤州里海の会」「NPO法人海辺づくり研究会」の「協働事業」として昨年、契約が締結、ノリづくり事業が行われることになりました。

嗅ぎ触り観て体験した

——環境教育として授業の位置づけは。

「総合学習」といい、週に3時間です。海苔づくりは、5年生全員がおこないました。準備検討をへて、今年の1月13日、砂浜から十数メートルの海にヒビを立て、海苔の胞子のついた海苔網を張りました。作業は、金萬さんやお仲間たち、海辺づくり研究会の方々が、船と海につかりながらやっていただきました。事前に、海苔はどうやってできるのか、どのように育つのかなどの授業もしていただきました。

子どもたちは、大人たちの協力作業を自分が

参加しているようにとらえたようです。海苔が育ち始めると、海鳥に食べられないように、自分たちが「海苔を守ろう」という気持ちが芽生えて、自転車で休みの日にも“保安”“観察”に通う子供もいました。

こんなお台場のような海では「つくれないんじゃないの？」と疑問に思ってきた子どもたちが、3月3日に、海苔網を引き上げ、そして直接手で、生ノリ摘みができたのです。天日干し場となった校舎の入り口は、海苔の香りがいっぱいになり、生ノリ入りの味噌汁をみんなでいただきました。

子どもたちにとって、この体験は、海の生きものを知る以上に、育たないと思った海苔がっいに育った喜び、感動とともに、お台場の海を「見直した」ことで、「誇り」を芽生えさせたことが、何事にもかえられない、とても大きな効果なのだと思います。

ぜひ、この取り組みは、皆様のご協力を仰ぎながら続けて生きたいと考えています。

(聞き手=MANA：中島 満)

追加挿入メモ：

◎参考ホームページ（ブログ）は、
海辺つくり研究会「お台場環境教育推進協議会」
のページ：

<http://umibay.cocolog-nifty.com/photos/odaiba/index.html>

「盤州里海の会」のページ：

<http://www.satoumi.net/index.html>

をご覧ください。

なお、本原稿は、ブログ版 [季刊里海] 通信「2006年10月12日付け」 「里海インタビュー（1）」

http://satoumi.cocolog-nifty.com/blog/2006/10/post_6cdd.html

に載せたファイル（ダウンロードできます）としていつでも読めます。

*copyright 2002~2006, manabooks-m. nakajima,
& Mieko. Kakuta, & J Fkyousuiren*